大学教育開発センター通信

SUMMER
Vol.7
2004

龍谷大学は、寛永16（1639）年西本願寺境内に開設した教育施設「学寮」に源を発し、現在、京都市に大宮学舎・深草学舎、滋賀県大津市に瀬田学舎と3つの学舎があります。中でも大宮学舎（写真）は龍谷大学発祥の地。
創建当初、明治12（1879）年の建物群が、ほぼ完全な形で残されており、本館（右上）をはじめ正門、守衛所、北黌、南黌が国の重要文化財に指定されています。

CONTENTS

特集1　学生による授業評価調査(授業アンケート)を考える ……2
「授業アンケート」は実施するだけでよいのか？　文学部助教授　長谷川岳史
授業アンケートについて考える　社会学部助教授　津島昌寛
語学分野の授業アンケート設計　国際文化学部助教授　M. ファーマノフスキー

特集2　2004年度学生による授業評価調査(授業アンケート)実施状況 ……6
授業アンケートについて　文学部哲学科教育学専攻4回生　服部和音

始動!!　指定プロジェクト ……8
教育評価　ぜひ公開研究会へ…　理工学部助教授　中沖隆彦
成績評価　今、求められる成績評価とは　文学部教授　小島　勝
導入教育　自由作文と課題作文　経済学部教授　田尻英三

ＦＤ活動紹介 ……10
法学部クラスサポーター制度ついて　法学部教授　鈴木龍也

研修参加記 ……11
「関西大学第6回FDフォーラム」に参加して　大学教育開発センター長　近藤久雄

他大学訪問記 ……12
東海大学湘南校舎　安岡高志教授を訪ねて　理工学部助教授　中沖隆彦

お知らせ　FDサロン・2004年度活動報告 ……14
新着情報・先生の知恵袋・おすすめの一冊 ……15
2005年度自己応募プロジェクト募集開始・「SSくん」紹介 ……16
編集後記

大学教育開発センター通信　第7号

■発　行　日：2004年7月30日
■編集・発行：龍谷大学　大学教育開発センター
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
TEL（075）645-2163　FAX（075）645-2190
http://www.ryukoku.ac.jp/fd
■発行責任者：近藤久雄

特集① 学生による授業評価調査（授業アンケート）を考える

学生による授業評価に対する考えは、同じ教員という立場であっても千差万別です。しかし、授業を受けている学生の声を積極的に聞くことは、大学の教育力を向上させることに繋がるのではないかと考えます。本学での学生による授業評価調査（授業アンケート）は、自主的に、このような思いから実施されています。全国的には、大学審議会の答申（1998年10月26日）を前後して、各大学で学生による授業評価が導入されています。

文部科学省報道発表「大学における教育内容等の改革状況について」（2004年3月23日）によりますと、授業の質を高める具体的な取組状況の中で「学生による授業評価の実施状況」は、平成14年度（2002）において、国立97大学（約98%）、公立61大学（約81%）、私立416大学（約81%）、国公私立全体で574大学（約84%）となっています。

社会的には、今や学生による授業評価実施は当然で、その結果をどのように活かしているか、どのように授業が改善されたかなどが重要なポイントとなっています。言い換えれば、活かせるような調査内容（方法・公表も含めて）であるかということも課題となっています。

大学教育開発センターでは、大学教育開発センター運営委員で、特に学生による授業評価調査（授業アンケート）について担当されている3人の先生方に「学生による授業評価調査（授業アンケート）を考える」というテーマで原稿を依頼いたしました。担当委員として、また、私見として自由に述べていただきました。

龍谷大学の授業アンケートの全学的な導入は1995年度と、全国的にも早かったのですが、2001年度と2002年度には授業アンケートを見直すという理由でとぎれておりました。その後、2002年度には、授業アンケート検討の一環で、教員対象に授業に関する意識・実態調査を実施いたしました。その結果も踏まえ、多くの先生方のご意見が反映された新しいアンケートとなり、2003年度に授業アンケートは再開しました。しかし、完全なものではなく、実施しながら改良していくことになっています。

龍谷大学として、学生による授業評価調査は、形式的に実施する調査ではなく、役に立つ、役に立てる調査を積極的にできればと考えています。一方で、個人的にアンケートを実施し日々の授業に活かしておられる先生方も多くいらっしゃいます。本学で全学的に行う学生による授業評価の持つ意味、また役割を検証しつつ、本当に授業改善に活かせるような調査実施を、大学教育開発センターでは目指していきたいと思っています。

調査票の授受風景

参考

■大学審議会の答申（平成10年10月26日）＜抜粋＞

21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）
―競争的環境の中で個性が輝く大学―

第2章　大学の個性化を目指す改革方策

1　課題探求能力の育成　―教育研究の質の向上―

（1）学部教育の再構築

2）教育方法等の改善　―責任ある授業運営と厳格な成績評価の実施―

④教員の教育内容・授業方法の改善

各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）の実施に努めるものとする旨を大学設置基準において明確にすることが必要である。

なお、個々の授業の質の向上を図るに当たっては、シラバスの充実等の取組が重要である。

⑤教育活動の評価の実施

教育の質の向上のため、自己点検・評価や学生による授業評価の実施など様々な機会を通じて、継続的に大学の組織的な教育活動に対する評価及び個々の教員の教育活動に対する評価の両面から評価を行うことが重要である。その際、教室における授業及び教室外の準備学習等の指示、成績評価などの具体的実施状況を評価の対象とすることにより、単位制度の実質化と教育内容の充実を図ることが重要である。

また、教育活動のあり方については、卒業生が働いている職場など外部の意見も聞き、それを踏まえて更なる改善につなげていくことが有効である。

■大学設置基準＜抜粋＞

（教育内容等の改善のための組織的な研修等）

第二十五条の二

大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。

（平一一文令四○・追加）

「授業アンケート」は実施するだけでよいのか？

文学部助教授　長谷川 岳史

本年6月14日から6月26日まで「学生による授業評価調査（授業アンケート）」（以下、授業アンケート）が実施されました。

2002年度に、教員を対象として実施された「授業に関する意識・実態調査」（回答率59.4%）の中の「この授業について、学生の授業アンケートを実施することについてどう思われますか。」（※複数回答あり）という設問に対して、

- 「行った方がよい」……48.2%
- 「行わなくてもよい」……14.8%
- 「どちらとも言えない」……30.9%
- 「無回答」…… 6.1%

という結果が出ているように、授業アンケートの実施については、肯定的な意見と否定的・消極的な意見とが半々というところが実情なようです。

これに対して2003年度の授業アンケート実施率は、全体として

- 講義科目…… 76.04%
- 外国語科目 ……84.09%

という比較的高い数値になっています。これらのデータを比較して私が思うのは、「授業アンケートの効果はよくわからないが、実施してくださいと言われているから……」というように、半ば義務的に「とりあえずやっておこう」と考えている教員がかなりいるのではないかということです。私もどちらかといえばこの部類に入ります。

周知の通り、この「授業アンケート」は「教育改善のひとつである授業改善」を「基本的な目的」としています。しかし、もし、上記のような私の推測が図星だとすれば、アンケートによって集められたデータの多くが、その目的のために利用されていない可能性が高いということになります。こういった現状であるとすれば、その原因はどこにあるのでしょうか。私は「実施方法」と「授業アンケートの項目」にその原因の一端があるように思います。

まず、「実施方法」ですが、今年度は2週間に渡って授業アンケートが実施されました。この期間に、担当しているほとんどの授業でアンケートを実施した教員が多くいると思います。これは教員だけでなく学生にとってもかなり負担です。アンケートを実施する時、「またアンケート～」という学生の声をよく聞きます。「こういう状態で実施されたアンケートの精度は？」と、教員としても不安に思うことがあります。

また、私の担当している「仏教の思想」では、授業の最後10分時間をとり、学生に対して、その日の授業内容を社会的・日常的な題材に置き換えたテーマを与え、B5の出席カード（自作）に自分の考えを記述するよう指示しています。ここに授業の感想や私に対する要望を書くことも可です。これは成績評価の対象外で、ただ単に私が出席をつける時の楽しみとして行っているだけです。学生も実によく書いてくれますし、その意見をもとに次回の授業を改善するよう努めています。しかし、授業アンケートを実施するとなると時間的にこれができません。つまり、授業改善を基本的な目的とする授業アンケートが、授業改善の邪魔になるのです。私としては「実施のスケジュールが過密なのではないか」「授業中に行うのが最善なのか」考える必要があると思います。

次に「アンケートの項目」に関しては、いつも気になるのは「あなたは、この授業の内容が理解できていますか」という項目です。勿論、理解してもらわないと困る授業もありますが、安易に短絡的に理解させないように敢えて結論を提示しない「考えさせる授業」もあります。こういう授業の場合、この項目は教員や学生を困惑させるだけで、あまり必要性を感じません。私はこの項目よりも「あなたの科目に対する興味・関心は深まっていますか」という項目を重視します。

このように、現在のアンケートの項目には、授業の内容形態によって、教員がその設問の必要性を感じられない項目が見受けられます。よって、今後、教員も学生も、「授業改善につながる」と実感できるようなアンケートの項目に改善し、授業形態の多様性にも対応していく必要があると思います。

アンケートを実施する教員が、その目的や必要性、利用価値を実感できない状況があるとすれば、学生も何のために何回も同じようなアンケートを取られているのか理解できていないはずです。逆にそういった点を改善すれば、教員や学生の意識も変わり、教員個々の授業改善、さらには龍谷大学の教育改善に実に有効な「授業アンケート」と認知されるようになるはずです。

大宮学舎

授業アンケートについて考える

社会学部助教授　津島 昌寛

「いったいなんのためにこのアンケートをしているのだろう。」FD委員の一人として、このような発言をするのは不謹慎かもしれません。しかし率直に聞きたいのです。「学生による授業評価アンケート」の目的は何なのでしょう。このアンケートには大学としての実質的な目的はなく、外部評価などの理由で、他大学がやっているからウチもやる、といった形式的なものにすぎないのではないのでしょうか。また授業評価の目的は授業改善に役立てることだと言われますが、いったいどれだけの教員がその評価結果を活用しているのでしょうか。

私も何回か授業評価アンケートを実施して結果をいただきましたが、それによって授業の内容、方法が以前と比べてとくに変わった（変えた、というべきでしょうか）という覚えはありません。もちろん、自分の授業にたいする評価は気にはなります。評価で全体の平均値を下回る項目があれば、なぜだろう、と頭を使い、一応あれこれ考えてはみます。しかし新学期が始まるころには、すっかり忘れてしまっているのです。当事者である教員がこんなあり様ですから、ましてや学生のアンケートにたいする意識はもっと低いと考えられるでしょう。学生の気分としては、あきらめに近いのかもしれません。やっても意味がないって！

深草学舎

本学4回生のMくんの意見もそういった声の一つです。（※彼には6月に授業評価アンケートについての意見を述べてもらいました。）「授業内容の改善などが本当に行われればよいが、アンケートの効果についてはなはだ疑問をもたざるをえない。」そしてMくんは、「ラクな授業」を理想とする学生の受動的な勉学態度とともに、アンケート実施の準備と手順における不適切さをその理由としてあげます。「授業開始（終了）直後に簡易な（ただ記入してくださいという）説明では、生徒が早く記入してしまおうと思うのは当然である。」アンケートに際して、教員はヤル気がなく、ただ事務的にやっている、と言っているのです。アンケートの趣旨が学生に正確に伝わっていないから、大学側が考える本来の「授業内容の改善」（仮にあったとして）とはかけ離れたものになってしまっている、とMくんは指摘します。

やはり学生にはちゃんとわかっているのです。私をふくめた教員のアンケートにたいする態度は善くも悪くも学生に読まれているのです。本来、授業は、教員主導で一方的に進められるのではなく、学生と一緒になって築きあげるもの、学生と教員の相互作用、コミュニケーションの産物なのです。それは授業評価アンケートでも同じ。教員側にアンケートを活かす気持ちがなかったら、学生が真剣になって答えてくれるはずがありません。

ではどうすればよいのでしょう。正直言って私自身、授業評価アンケートの目的と活用の仕方について整理ができていません。しかし実施という前提のもとで、あえて意見を述べますと、まずは授業評価アンケートの明確な目的を掲げること。そして実施する教員はその目的を十分に自覚する必要があります。目標の設定／質問項目の作成には、学生に参加を呼びかけ、彼らの意見を反映させるのも一つのやり方だと思います。さらに学生・教員へのフィードバックとして、評価結果を公表する必要もあるでしょう。（※私見としては、授業評価の実施・公表を拒否する教員の方の主義主張は尊重すべきだと思います。貴重な意見があるかもしれません。拒否する教員の方には、授業評価のかわりとして、その理由を文書にして提出していただくのはどうでしょう。もちろん、この文書も公表するのは言うまでもありません。）アンケート評価を直接、昇進・昇給に反映させるという意見もありますが、私はそこまでする必要はないと思います。しかし授業評価の高い（低い）教員にたいしては、「ベスト・ティーチャー賞」（「ワースト・ティーチャー賞」or「ガンバリマ賞」）を設けて表彰するぐらいの心意気が大学側にあってもよいのではないでしょうか。

大学教育のあり方としては、どれだけ学生の知的好奇心をかりたて、彼らの潜在的能力を引き出すことができるかにつきると思います。そのために教員は学問のおもしろさ・深さを、情熱をこめて学生に伝達しなくてはなりません。それが結果的には授業評価に結びついていくものと考えるからです。教職員・大学当局がそれを十分自覚しないと、抜本的な教育改革などありえないでしょう。

（※自戒の念も込めながら自由に執筆しています。個人的な批判は意図していませんが、関係者にたいして無礼な表現があったとしたら、お許しください。）

語学分野の授業アンケート設計
――語学授業の特徴をふまえて

国際文化学部助教授　M. ファーマノフスキー

近年、各学部のカリキュラムがますます複雑化・専門化してきていることは、我々の知るところです。この結果、単一の授業アンケートでは、以前にも増して学生や教員のニーズに効果的に応えていくことが困難となっています。おそらく、この問題についての長期的な解決策は、コンピュータ・データベースの活用にあると思われます。これにより、大学公式の授業アンケートが、大学が総括的に全学部にとって有益と考えてきた基本的な評価の設問を維持しつつ、個々の教員や学部の希望にも迅速に対応したものとなりうるのです。また、今後は、それぞれの学部・学科が、教員に対して彼らの分野や教授法についての細かな設問を案出するよう働きかけることになるとも予想されます。

ここでは、一般に語学の授業で行われている教授法やその条件が、他分野のそれとどのように異なるのかを考えてみます。また、そうすることにより、どのような授業アンケートが我々のニーズを最も満たすのかを考えたいと思います。

一般的には、下記の点が多くの語学授業における特徴とされています。

- 通常、講義形式の授業より少人数である。（20～45人程度）
- 教師の話す声・発音・アクセントが学生にとって非常に重要なことがある。
- ペアワークやグループワークが教授法に不可欠である場合が多い。
- 教授法は、単一の授業の中においても、学期の中においても、大きく変化することがある。
- レポート、小テスト及び口頭発表は、筆記試験より評価に用いられることが格段に多い。
- 学生が現在の授業レベルが適当であるかどうかを考える際、以前に受けた授業が主要因となることがある。
- 授業は教科書に基づいて組み立てられることが多い。

以上に述べた語学授業の特徴は、授業アンケートを作る者にとって多くの意味を持ちます。それについては更に考察が必要ですが、下記の点に的を絞った設問を含めることで、語学の授業アンケートはより有用なものになると考えられるでしょう。

- 教師の声がよく聞こえているかどうか、アクセント、話すスピード及び発音。
- 授業における第一言語（学生の母語）の使用に関して、教師の使用及び使用の際の基準。
- 出される宿題の量と性質。
- 主観的な側面が濃い宿題やワークを評価する際に用いられる方法。
- 学生が以前に受けた授業内容を考慮したテキスト・副教材（CD、ワークブックなど）の選択及び使用。
- コミュニケーションを促すために教師が取り入れる対話形式の演習（特にペアワークやグループワーク）の適切さ・有効性。
- クラスの大きさに関する問題。

民間部門や商業界では、アンケートによって視聴者や潜在的購買層に合わせた対応をしたりターゲットを絞ったりすることは、標準的な手法となってきています。高等教育の提供者として、社会や親から委ねられた立場にある我々には、学生の変化するニーズに応えるため、先に述べた専門的・非専門的手段を採用していく必要があり、また、そうすることにより、我々は、カリキュラム設計や教授法についてプロとしての水準を上げていくことができるのです。

瀬田学舎

2004年度

学生による授業評価調査（授業アンケート）実施状況

6月に授業改善を基本的な目的として「学生による授業評価調査（授業アンケート）」を実施しました。各授業の集計結果については、既に担当の先生方に配布しました。全学集計については全教員に配布し、間もなく、Webでも学内に公表する事になっております。大学構成員全体でこの集計結果を受けとめ、本学の教育力を向上させるために活用できればと思っています。

この号では、実施についての基本的なデータを紹介することとします。

大学教育開発センター
http://www.ryukoku.ac.jp/fd/

2004年度学生による授業評価調査（授業アンケート）

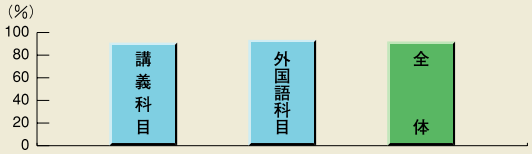
■対象科目　2004年度通年・前期開講の講義科目及び外国語科目
（ただし、演習、講読、実験・実習、実技・実習、大学院科目、大学院との合併科目、留学生別科科目は除く）

■実施期間　2004年6月14日（月）～6月26日（土）
台風の影響で28日（月）まで実施

■対象科目数　2,032科目（講義1,207科目・外国語825科目）
※調査票は講義科目用と外国語科目用とで質問内容が少し異なります。

Ⅰ．実施率

	総数	実施数	未実施数	実施率
講義科目	1,207	1,071	136	88.73%
外国語科目	825	752	73	91.15%
全体	2,032	1,823	209	89.71%



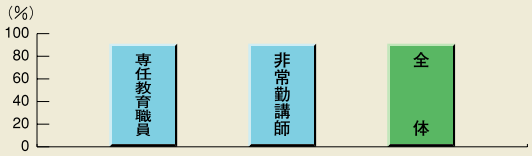
講義科目88.73%、外国語科目91.15%、全体で89.71%の実施率でした。

Ⅱ．専任教育職員、非常勤講師別の実施率

講義科目、外国語科目別で専任教育職員、非常勤講師毎の実施率を紹介します。講義科目、外国語科目共に、非常勤講師の実施率が若干高いですが、ほぼ同じ割合の実施率となっています。

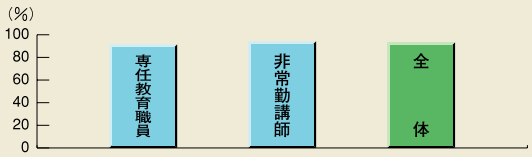
講義科目

	総数	実施数	未実施数	実施率
専任教育職員	585	519	66	88.72%
非常勤講師	622	552	70	88.75%
全体	1,207	1,071	136	88.73%



外国語科目

	総数	実施数	未実施数	実施率
専任教育職員	241	215	26	89.21%
非常勤講師	584	537	47	91.95%
全体	825	752	73	91.15%



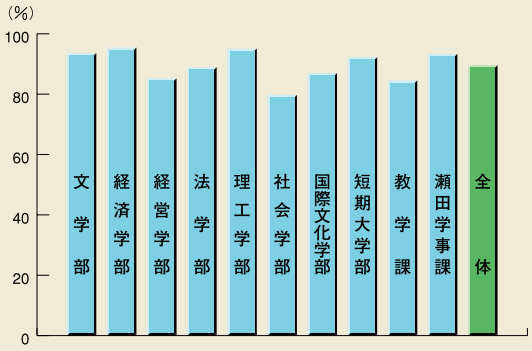
Ⅲ．開講責任学部別実施率

次に講義科目、外国語科目別で開講責任学部毎の実施率を紹介します。開講責任学部が各学部教務課となっている科目は、学部専攻（固有）科目、（学部によって一部諸課程科目を含みます。）教学課となっている科目は、共同開講（共通）科目・学部共通コース科目・諸課程科目、瀬田学事課となっている科目は、共同開講（共通）科目・諸課程科目です。

講義科目、外国語科目いずれも半数以上の開講責任学部で9割を越える実施率となっています。ただし講義科目で、一番高い実施率が94.57%、一番低い実施率で78.85%と15.72%の開きがあります。

講義科目

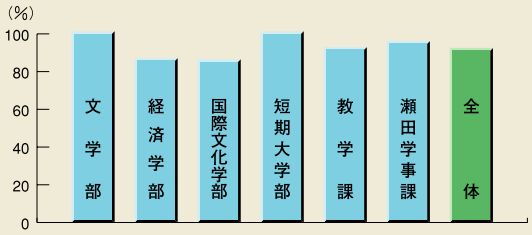
	総数	実施数	未実施数	実施率
文学部	262	243	19	92.75%
経済学部	92	87	5	94.57%
経営学部	64	54	10	84.38%
法学部	67	59	8	88.06%
理工学部	121	114	7	94.21%
社会学部	104	82	22	78.85%
国際文化学部	72	62	10	86.11%
短期大学部	81	74	7	91.36%
教学課	251	210	41	83.67%
瀬田学事課	93	86	7	92.47%
全体	1,207	1,071	136	88.73%



共同開講（共通）科目の外国語（基礎科目）を外国語科目として実施しました。また、外国語科目用の調査票の方が適当と判断し、講義科目から外国語科目として実施した科目もあります。

外国語科目

	総数	実施数	未実施数	実施率
文学部	1	1	0	100.00%
経済学部	7	6	1	85.71%
国際文化学部	141	120	21	85.11%
短期大学部	16	16	0	100.00%
教学課	508	465	43	91.54%
瀬田学事課	152	144	8	94.74%
全体	825	752	73	91.15%

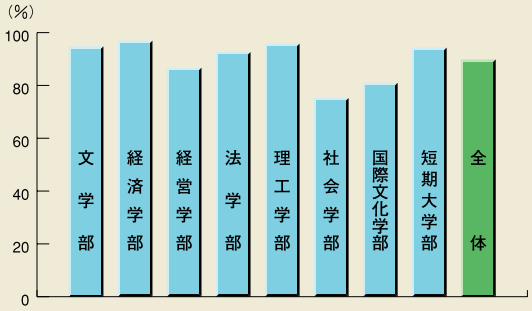


Ⅳ．専任教育職員の所属学部別実施率

専任教育職員は、先の開講責任学部とは別に、所属学部で実施率を見ることができます。
一番高い実施率が95.96%、一番低い実施率で74.23%と21.73%の開きがあります。

講義科目

	総　数	実 施 数	未実施数	実 施 率
文　学　部	177	166	11	93.79%
経 済 学 部	99	95	4	95.96%
経 営 学 部	84	72	12	85.71%
法　学　部	108	99	9	91.67%
理 工 学 部	116	110	6	94.83%
社 会 学 部	97	72	25	74.23%
国際文化学部	115	92	23	80.00%
短 期 大 学 部	30	28	2	93.33%
全　　体	826	734	92	88.86%

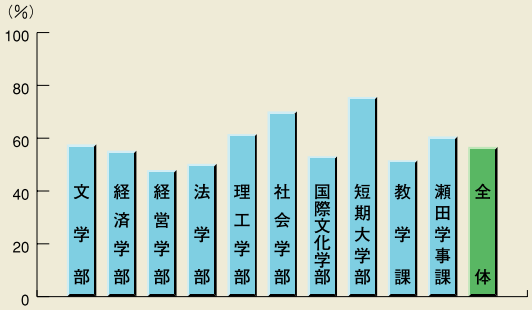


Ⅴ．開講責任学部別回答率（実施された授業のみを対象）

学生による授業評価調査の実施率に対し、実際、調査票を受け取った学生がどのくらい回答したかについて紹介します。回答率は、受講登録者数に対し、どれだけの学生が調査票に回答したかについて算出しています。ただし、受講登録者数は科目によって多少の誤差があり得ます。今回は、調査が実施された授業のみを対象とし、講義科目、外国語科目別で開講責任学部毎の回答率を紹介します。受講登録はしたものの受講する意思がない学生もいますが、回答率がほぼ受講者数と考えると、受講登録をした学生がどの程度授業に出席しているのかという実態については、講義科目で55.70%、外国語科目で80.08%でした。受講登録者数と現実の受講者数との差について、講義科目、外国語科目の違いによって大きく開きが出ています。

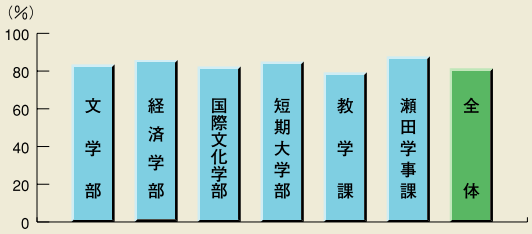
講義科目

	受講登録者数	回 答 数	回 答 率
文　学　部	15,930	9,026	56.66%
経 済 学 部	7,558	4,100	54.25%
経 営 学 部	7,906	3,711	46.94%
法　学　部	9,423	4,643	49.27%
理 工 学 部	11,276	6,825	60.53%
社 会 学 部	6,966	4,815	69.12%
国際文化学部	7,684	4,007	52.15%
短 期 大 学 部	4,881	3,641	74.60%
教　学　課	27,085	13,709	50.61%
瀬 田 学 事 課	12,874	7,679	59.65%
全　　体	111,583	62,156	55.70%



外国語科目

	受講登録者数	回 答 数	回 答 率
文　学　部	28	23	82.14%
経 済 学 部	148	125	84.46%
国際文化学部	2,261	1,832	81.03%
短 期 大 学 部	636	532	83.65%
教　学　課	15,671	12,211	77.92%
瀬 田 学 事 課	4,564	3,943	86.39%
全　　体	23,308	18,666	80.08%



学生の声　授業アンケートについて

文学部哲学科教育学専攻　4回生　服部　和音（中央執行委員会委員長）

授業アンケートは、2003年度後期から各授業で実施され、私も何回か記入しました。このような授業アンケートが実施されることは、私たち学生にとって有益なものだと思います。自分が受けている講義に対して不満や要望があっても、教授の方に直接言う学生は少ないと思います。授業アンケートを実施することで、普段の学生の意見がはっきりと出てきます。学生は、それぞれ学びたいものを持って大学へ入ってきています。課外活動もありますが、やはり第一目的は正課活動であり、授業料を払っている以上、質の高い講義を求めています。講義の進め方や内容は常に改善していくべきであり、そのためには実際に講義を受けている学生の意見は不可欠だと思います。私たち学生は、単位の取りやすさを基準に「よい講義」と「悪い講義」を判断するわけではありません。「何年間も講義内容も試験問題も同じ講義」は、単に「単位の取りやすい講義」であり、決して「よい講義」ではありません。求めている講義は単なる教科内容の知識の獲得だけではなく、受けていて面白い、楽しいと思える講義です。内容が充実していておもしろい講義は、例え1講目でレポートがあって試験も難しくても、ちゃんと講義に出て一生懸命勉強します。私は今年の6月に高校へ教育実習に行き、そこで痛感したことなのですが、生徒はすごく正直で、授業が面白かったらちゃんとノートもとって質問にも食いついてきてくれますが、面白くなかったらすぐに寝てしまいます。高校生も私たち大学生も、基本的に同じだと思います。

授業中の私語や携帯電話の使用は、教授の方にとってだけではなく真剣に講義を受けている学生にとっても不快極まりないものです。講義に対して要望する以上、私たち学生も講義を受ける上での最低限のマナーを守る義務があると思っています。

教育実習のときに私も生徒に対してアンケートを行ったのですが、受けている側の意見として本当に参考になり、私自身の授業方法や内容を改善していくことが出来ました。このことからも、2003年度後期から行われている授業アンケートは、教授の方と学生両者にとって有益なものになると確信しています。アンケートの公表方法やアンケート項目にはまだ改善の余地があると思いますが、これから私たち学生の声も授業アンケートの項目や公表方法にも取り入れていってほしいです。授業アンケートは、大学において大きな基本柱である正課面の質の向上に不可欠になっていくと思います。

始動!!　指定プロジェクト

～プロジェクト代表者からの報告～

指定プロジェクトは、2004年度より大学教育開発センターの新たな事業として、「教育評価」「成績評価」「導入教育」の3つのテーマで実施しています。プロジェクトが始動して早3ヵ月。今回はそれぞれの現在の進捗状況と今後の予定をお伝えします。

テーマ：教育評価

大学教育の改善に資するための一つの方法として、各大学で、学生を対象とした授業アンケートやカリキュラムアンケートが行われています。どのようなアンケートを行うことが適切であるか等、本学の蓄積にとどまらず、他の大学の状況についても教育評価と関連づけて調べます。

■ぜひ公開研究会へ…

理工学部助教授　**中沖隆彦**

これまで大学教員の評価は、ほとんどの場合研究に対するもので、教育に関してはあまり省みられていません。教育に対して熱心な教員、授業に工夫を凝らした教員は研究成果と同等に評価されるべきだと考えています。この「教育評価」プロジェクトでは国内外の教育評価について調査し、実際に運用できる教育評価システムを検討することを目的としています。このようなことから、プロジェクトメンバーは各学部から1人づつ出ていただき学部を越えた全学的な視点で検討しています。このプロジェクトを通して教育に対する評価方法を確立して、教員の教育に対するモチベーションを高めること、さらには学生の教育に対する満足度を高めることに少しでも貢献できることを期待しています。プロジェクトの研究会は1カ月に1回定例会を開催しています。これまでのプロジェクトの活動は4月に大柳教授（理工学部）による「UCデービス（アメリカ）における教育評価」、5月は私が「日本技術者教育認定機構（JABEE）の取り組みと日本国内における教育評価」、6月はケント助教授（国際文化学部）による「海外の教育評価の例とその制度が含む意味」という話題を提供いただき活発な討論を行っています。また6月24日には私と事務局の方とで国内で教育評価について先進的な取り組みを行っている東海大学に安岡教授を訪ねて、様々な実践例と問題点について情報をいただきました。詳細については別途報告させていただきます。今後は教育評価としての授業アンケート検討および教育評価システムとそれをフォローするシステムの検討を行う予定です。定例会は広くご意見をいただくために公開研究会としていますので、是非参加いただいて、ご意見をいただきたく考えています。

第2回（5月31日）公開研究会の様子。（深草学舎紫英館2階東第2会議室）

公開研究会は深草、瀬田、大宮の順に3学舎で開催しています。
第3回（6月28日）公開研究会の様子。（瀬田学舎1-533会議室）奥からポーリンケント国際文化学部助教授、加藤正浩経営学部教授、中沖隆彦理工学部助教授。

公開研究会開催記録

◆第1回◆
開催日時：4月19日（月）17：00～19：30
瀬田学舎1－533会議室
テーマ：「UCデービス（アメリカ）における教育評価」
報告者：大柳満之（理工学部教授）

◆第2回◆
開催日時：5月31日（月）17：45～20：00
深草学舎紫英館2階東第2会議室
テーマ：「理工学部物質化学科のJABEE対応の教育評価システム」「国内の授業評価と教育評価」
報告者：中沖隆彦（理工学部助教授）

◆第3回◆
開催日時：6月28日（月）18：00～21：00
瀬田学舎1－533会議室
テーマ：「海外の教育評価の例とその制度が含む意味」
報告者：ポーリン ケント（国際文化学部助教授）

◆第4回◆
開催日時：7月29日（木）15：00～18：00
大宮学舎西鬺3階小会議室
内　容：教育評価としての授業アンケートの検討・具体的なアンケート作り

テーマ：成績評価

大学における学生の成績評価をどのようにすべきかについて、その現状と課題を国際的比較もまじえながら学内外にわたって把握したいと考えています。そのために資料収集、他大学訪問、学内の教員および学生対象の調査などを行う予定です。

■今、求められる成績評価とは

文学部教授　**小島　勝**

本プロジェクトの目的は、学生の成績評価の現状と課題を明らかにし、より妥当で学生にとっても役立つ成績評価を行うための基礎資料を得ることにありますが、現在、本年度の本学全学部のシラバスにおける「成績評価の方法」「試験と成績評価」「試験方法・成績評価方法」「成績評価方法」などの欄に記入された各先生方の成績評価の実際について分析しています。成績評価の観点（定期試験・レポート・小テスト・出席点などの比重や総合点など）の事由や関連要因を探究しようと、入力作業を行っているところです。

成績評価のあり方については、成績評価の表示や、評価の基準、授業との関連づけをどのようにするのが望ましいのかなど、課題が山積しています。これまでの成績評価は、概ね教員各自の評価観に委ねられていて、

全学部のシラバスからデータを分析し、よりよい成績評価を検討します。左から小島勝文学部教授、海谷則之文学部教授、天野正輝文学部教授。

「甘い先生」の授業に学生は殺到し、「辛い先生」の授業は敬遠される傾向にありました。定期試験においても、「参照すべて可」の隣の教室では、カンニングが摘発されることもあり得ました。確かに、このような成績評価のありようにはそれなりの事情や価値もあるのでしょうが、より「公正」で、学生の学修意欲と専門的学力の向上に繋がる成績評価を目ざすことが今求められています。今後、関西圏の大学や海外の大学の成績評価に関する資料も蒐集するとともに、本学の教職員の皆様へのアンケートや聞き取りなども行いたいと考えていますので、ご協力をお願いします。

テーマ：導入教育

高校教育と大学教育の連続性と非連続性を考えながら、新入生をどのように大学教育に導くのが適当かについて研究します。資料収集のほか、入学者の追跡調査、入学時の学力調査、高校生の実態調査、高校教師への聞き取り、作文教育等の実験などが必要ですが、まずは学生の日本語能力について現状を調査します。

■自由作文と課題作文

—平仮名がきちんと書けない学生—

経済学部教授　**田尻英三**

文学部の赤松先生・日下先生、法学部の石井先生・本多先生、経済学部の御前先生・李先生・小瀬先生から授業中に、「自分の経験をとおして自由に書きなさい」というテーマで学生に書かせた作文をいただきました。

現在、文学部日本語日本文学科の大学院や学部の学生にまずチェックしてもらっています。学生の作文の中で、表記（おかしな平仮名や漢字の誤字）には赤の

左が田尻英三経済学部教授。

蛍光ペンで、文法や語彙の誤りには黄色の蛍光ペンで、論理的に明らかにおかしい箇所には青の蛍光ペンでアンダーラインを引いてもらっています。そして、文法や意味の間違いの箇所は赤ペンで修正してもらっています。それを最終的には田尻がチェックする予定です。

文中の誤りをチェックし、蛍光ペンで色分けをします。

今見ている範囲で言えば、平仮名がきちんと書けない学生が結構います。また、「自分の経験をとおして自由に書きなさい」というテーマのためか、無理に自分の体験から該当するものを探しているものもあります。字数を増やすために強引な論理を展開しているものもあります。学部間でも、作文の個性が出ています。学生の作文は細かな分析が必要なため、元のものは田尻が保管し、学生にはコピーを返す予定です。

次には、7月の第1･2週の間に、各先生方の授業に合わせた3つのキーワードを与えて、それを使った作文を書いてもらう予定です。それには、学生自身が題を付けるように、と授業中に言っていただくことになっています。2回目の作文で、キーワードを指定した場合、最初の作文に比べてどれぐらい論理性がある文章が書けるかをみる予定です。

そして、最後にはそれらの作文中の問題の傾向をデータ化するつもりです。詳しい分析は夏休みに行います。

FD 活動紹介

Faculty Development

教育改善のために様々な取り組みが行われています。

法学部クラスサポーター制度ついて
～学生と教員のパートナーシップ～

法学部教授　鈴木 龍也

学生と教員のパートナーシップ

特定分野における専門的知識や経験を有する学生、あるいは大学での学習や生活における先達としての上級生が、教員と協力して他の学生や下級生の指導に当たる。それにより対象となる学生への教育が充実したものとなるだけでなく、指導に当たる側の学生も成長し、教員も第三者的な視点からの意見を聞くことにより教育の力量を一層高めることが出来る。法学部でここ数年間取り組んできた学生と教員のパートナーシップについての考え方を短く言えば、このようなことになるでしょうか。法学部ではこのような考えに基づいて実際にいくつかの試みを行い、ある程度の成果が目に見える形であがってきています。ここでは法学部におけるパートナーシップの目玉であるクラスサポーター制度を取り上げ、成果や問題も含めてご紹介したいと思います。

クラスサポーター制度

法学部ではゼミナール形式での少人数教育を重視しており、新たに入学してきた1年生に対しては基礎演習Ⅰ・Ⅱを、それぞれ前期・後期に配当しています。基礎演習Ⅰでは、新入生にレジュメやレポートの作成方法、発表や討論の仕方など、大学での学修に必要不可欠なノウハウを身につけてもらうことを第1の目標としています。そして基礎演習Ⅱにおいては、法律学や政治学を専門的に学ぶための基礎的な知識や方法の修得、および社会的な問題への関心の育成という目標がそれに加わります。内容はかなりの程度担当する教員の裁量に任されていますが、年度末の12月には法律学科、政治学科それぞれの合同討論会が開催され、これにはほとんどの基礎演習が参加します。学生はこのような基礎演習Ⅰ・Ⅱの履修を通して、自ら考え、積極的に学ぶ力を身につけていく、という設計になっています。

ところが、近年従来のような効果をあげることが出来なくなってきました。素直でまじめではあるけれども主体的な学習意欲をなかなか表に出さない学生、教員側からコミュニケーションをとるのが難しい学生が増えてきたためです。そこで法学部では2001年度より基礎演習Ⅰ・Ⅱにおいて「クラスサポーター制度」を導入することにしました。

クラスサポーターになるのは法学部2～4年生の希望者で、ボランティアとして教員とパートナーシップを組んでクラスを運営し、教員と新入生の間の潤滑油の役割を果たします。さらには、新入生の学習面や学生生活面における相談相手にもなります。そしてこのような活動を円滑に行うため、それぞれのクラス単位で教員と基礎演習の運営方法についてミーティングを行うとともに、月に数回は全サポーターによる「クラスサポート委員会」を開催し、それぞれのクラス運営について情報を交換します。この委員会は12月の合同討論会の実質的な主催者でもあり、討論会の運営方法や討論課題はここで決定されます。

クラスサポーター制度の現状と問題点

このようなクラスサポーター制度を導入して今年で4年目を迎えました。当初は1クラスに1名のサポーターを確保することさえ難しい状況でしたが、現在では1クラス2名のクラスサポーターを配置できるようになり、運営も安定してきました。このような中で、基礎演習Ⅱの登録率は、例年90%前後だったものが、この制度を導入した2001年度より3年連続99%以上になっています。法学部においては基礎演習は必修でないため、基礎演習Ⅰから基礎演習Ⅱへ上がる際にゼミを離脱していく学生が多数いたのですが、その数を大幅に減少させることに成功したわけです。また、従来教員側で企画運営していた合同討論会を、クラスサポーターを中心とした学生が主導するようになり、自分たちで討論会を開催しているという自覚が新入生にもクラスサポーターにも芽生えたためか、以前にも増して活発な討論が行われるようになりました。さらには、クラスサポーター有志の企画によって、オリエンテーション期間中に、サポーターによる新入生のための個別履修相談会を開催し、成功させました。これはクラスサポーターが、新入生が何を求めていて、どうすれば新入生のためになるのか、真摯に考えるなかから出てきた企画で、クラスサポーター制度が新入生だけでなくクラスサポーター自身の成長にも繋がっていることを示す具体例と言えましょう。

このように教育上の効果は着実にあがっていますが、問題がないわけではありません。特に最近苦慮しているのが、クラスサポーター同士の人間関係です。クラスサポーターの人数が増加したことによって、意見をまとめるのが難しくなり、派閥のようなものが形成されたりして、クラスサポーター同士の関係がなにかとぎくしゃくするようになってしまいました。しかし、より根本的な問題はサポーターと教員の関係です。学生に任せっぱなしになるのではなく、また教員からの押しつけになるのでもなく、相互の役割をどのように調整し、協力体制をどのように作っていくかは、教員にとって、そしておそらくはサポーターにとっても、大変難しい問題です。永遠の課題とも言えるようなものですが、経験を積み重ねるなかですこしでも良い形を模索していきたいと考えています。

研修参加記

大学教育開発センタ‐‐には、他大学や他機関からFDに関する様々な研修の案内が届きます。「大学教育開発センタ‐‐News」や掲示等でお知らせしていますので、興味、関心のある研修には是非ご参加ください。

ここでは、去る6月2日(水)、関西大学で「新しい教育実践と授業評価のありかた」をテ‐‐マに開催された第6回FDフォ‐‐ラムに参加された近藤久雄大学教育開発センタ‐‐長（法学部教授）の報告を紹介します。

「関西大学第6回FDフォーラム」に参加して

大学教育開発センター長　近藤 久雄

6月2日水曜日午後、関西大学千里山キャンパスに出かけました。目的は関西大学のFDフォーラムを見学することでした。

関西大学では全学共通教育推進機構が中心となって、年に2回のペースでFDフォーラムを行っており、今回は第6回目ということでした。参加は自由で、水曜日の午後2時から5時までという時間帯にもかかわらず、教員、事務職員それにパネリストの学生まで合わせて60名ほどの方が参加しておられました。

統一テーマは「新しい教育実践と授業評価のありかた」ということでしたが、前半は早稲田大学の野嶋栄一郎人間科学部長の講演と関西大学社会学部の雨宮俊彦教授の授業アンケートの分析結果報告、後半は各学部および外国語教育研究機構の代表と学生の代表によるパネルディスカッションでした。関西大学は千里山キャンパスと高槻キャンパスに分かれていますので、両キャンパスを衛星中継で結ぶと言う大仕掛けの演出でしたが、高槻には2～3名の参加者しかなく、ちょっと拍子抜けの印象ではありました。

講演、報告、パネルディスカッションで共通して問題となった点を、一聴講者の印象としてまとめてみると、おおよそ以下のように整理できるように思われます。

①授業評価アンケートの評価項目の重要さ。②授業評価が授業改善に結びつくのか否か、あるいは結びつけるための工夫や方策はいかにあるべきか。③授業評価アンケートの学生からの答えや、アンケートから得られたデータのリライアビリティー。④授業改善とは何か、板書法や宿題等をはじめとする単なる技術的な問題なのか、あるいは内容や水準といったところまで視野に入れるべきなのか。上記のような点は、龍谷大学でも授業評価アンケートを実施し、その結果を利用する場合に当然考えておかなければならない問題でありますが、実はこうした問題は案外古くて新しい問題でもあるのかもしれません。つまり、アンケートという形で、授業を構成すると思われる項目、すなわち評価項目に的を絞って学生の意見を聞き、教員は聴くべき学生の意見には謙虚に耳を傾け、単に技術的のみならず授業の内容についても磨きをかけることが求められているように思われます。このことは、言葉を変えると、学生との対話による授業、学生とのコミュニケーションが上手く取れている授業、そして教育の最も大切な点である学生の人間としての成長に結びつく授業を行うための模索であるように思われます。ディスカッションのパネリストとして学生にも参加をしてもらっている意義は、まさにこの点にあるのでしょう。

関西大学では学生への授業アンケートに対して、教員の側からのコメント集が作成されており、事務室等で閲覧可能とのことでした。こうした取り組みも、教室の中だけでなく様々な機会を利用して、教員と学生との間のコミュニケーションの充実を図ろうとする関西大学の努力の一環のように思われました。

関西大学においては、授業評価についても、教育とは何かという本質を見失うことなく、地道で慎重な模索が行われているという好印象を得て、京都行きの阪急電車に乗りました。

東海大学湘南校舎 安岡高志教授を訪ねて

理工学部助教授　中沖 隆彦

大学教育開発センターの指定プロジェクト「教育評価」の研究会を1か月に1回行っています。研究会では国内と国外の大学において実施している教育評価について調査し、評価システムを検討することが目的です。今回は国内で教育評価に先進的な取り組みを行っている東海大学の安岡高志教授を訪ねて、東海大学における教育評価についてお伺いした事を報告します。訪問した日に2003年度Teaching Awardに選ばれた教員の講演もあり、部外者である我々も参加させていただくことができましたので併せて報告します。

東海大学湘南校舎正門からの並木道をぬけたあたり。正面の塔のある建物は1号館。

教育評価の背景

最近大学をとりまく環境が大きく変わってきています。従来大学教員の評価は“研究”に対してのウェートが高く、論文を何報書いたか？　質の高い論文（インパクトファクターの高い論文）をどれぐらい書いたか？　などが評価の対象でした。しかし最近では“研究活動”に加えて“教育活動”と“社会活動”の3つが評価項目として挙げられています。私は教育についての専門家ではないので、詳しいことは分かりませんが大学教員の多くが教育に目を向けるようになってきたのは1990年以降ではないでしょうか？　ゆとり教育の反動、世界的に見た日本の教育水準の相対的低下、バブル崩壊による先行き不安などが挙げられると思います。教員自身は自分を“研究者”と見る傾向が強く“教育者”としての認識は必ずしも高くなかったと思います。私自身のことで言えば学科での教務委員や日本技術者教育認定機構（JABEE）による教育プログラムの認定を受けるためのワーキンググループに参加して“教育”について改めて考える機会がありました。これらの活動を通して教育の重要性を再認識し、また教育に真摯に取り組んでいる教員はもっと高く評価されてもいいのではないかという結論に達しました。つまり論文を1報書いた事と同等の教育評価の定量が必要ではないかと考えています。

安岡教授との懇談

6月22日に新横浜からJR横浜線、小田急線を乗り継いで平塚市にある東海大学湘南校舎を訪ねました。広い敷地の奥の建物に安岡教授の居室があります。安岡先生の授業の関係で3時過ぎに訪問させていただきましたが、安岡先生はこの手の訪問を受けることが多いのでしょう、気安く部屋に招き入れていただきました。その後2時間ほど懇談させていただき、大学として実

左が安岡高志先生（東海大学理学部化学科教授・東海大学教育研究所所長）。研究室で。

践している教育評価、それに加えて安岡先生の個人的な意見も聞かせていただきました。

東海大学が教育のことで注目を集めるのは、その取り組みが早かったことが挙げられます。授業アンケートは安岡先生を中心として1984年から有志の間で始めており1993年からは大学全体としての取り組みになっています。授業アンケートは全教員強制的なものではなく、“教育”を評価してほしい教員は受け、結果を公表する必要があるということですが、全体で80%以上の教員が授業アンケートを実施（公表含む）しているとのことです。授業アンケートは5段階で評価され3.5以上の評価であれば問題ないとみなすということです。また評価の高い教員をTeaching Awardとして表彰する制度もスタートさせています。選抜方法は授業アンケート結果の上位者をピックアップし、優秀賞10名と最優秀賞1名を決定しています。最優秀賞に選ばれた教員は表彰状と副賞の研究費10万円が授与されるということです。また表彰を受けるのは特定の教員になってしまう可能性もあるので、同じ教員は2回までしか受賞できないということでした。

授業アンケートによる教育評価の有効性がしばしば問題になります。いつアンケートをとるのか、出席の悪い学生に評価できるのかといったことです。安岡先生によると、例えば出席と評価の相関など様々なパターンを調査した結果、学生アンケートによる授業評価はある程度信頼をおいてもいいと結論されたということです。この“ある程度”が問題だと言われればそれまでですが、東海大学ではアンケートの他に評価できるものがあれば挙げてほしいという教員アンケートを行ったところ、同僚評価、上司による評価などがありましたが、これらは本質的には授業評価です。中には今は分からないがもっといい評価方法があるといった回答もあったそうです。要するに完璧ではないが学生による授業アンケートに代わるものはないし、ある程度信頼もおけるといったところでしょう。

教員評価は研究評価、教育評価、社会活動の評価の3つの評価から行われるということです。研究評価については制度的には確立されていないかもしれませんがある程度行われています。しかし後の2つについてはほとんど省みられることがなかったのではないでしょうか。大学は学生への教育が中心であり、研究をいかに学生に還元できるか、教育の質を高められるか、社会活動を通して学生に伝えられるものは何かが問われます。教員はこれらすべてに最善の努力を払うことが要求されます。教育は教員にとって最優先のことであり、安岡先生の個人的意見ではあるがということでしたが、教育評価を賞与なり給与に反映させることができれば教員はもっと真剣になって授業改善に取り組むだろうと言われていました。しかし現実には東海大学ではこの制度は導入していないし、現在の日本の大学では導入の難しい制度であろうともコメントされていました。

Teaching Award講演会

Teaching Award講演会　Cindy Wilson先生
（東海大学外国語教育センター第1類：非常勤講師）

夕方5時からTeaching Awardを受賞された2人の教員の受賞講演を聞かせていただきました。龍谷大学ではFDサロンに対応した会ですが、学生も参加していて質疑のときに積極的に質問をしていたのが印象的でした。最初は英語のCindy先生でspeaking, writingなどの授業の進め方について様々な工夫を凝らした取り組みを紹介されました。native speakerなので英語で講演をされていました。次が化学を担当されている及川先生で、ご自身の授業を多方面から解析しフィードバックをかけて指導法を検討されていました。両先生ともTeaching Awardを受賞されただけあって非常に熱心な指導をされていることが強く印象に残りました。

Teaching Award講演会　及川義道先生
（東海大学理学部基礎教育研究室：講師）

後　記

今回の訪問で最も印象に残ったことは安岡先生が何回か口にされた教育の“組織的取り組み”ということです。大学で授業は個々の教員に任されたところが多く、縦横の連携が乏しいため組織的教育や相互評価が不十分ということだと思います。組織的取り組みはFD（Faculty Development：学部としての発展）に通じています。東海大学では積極的に教育の組織的取り組みを推進しようとしていることが伺えました。教育評価が確立されれば、今後はもっと教育活動が高く評価されるでしょうし、学生の立場にたった教育が実践されていくものと期待されます。

謝　辞

お忙しいところ時間を割いていただいた安岡教授、ならびにTeaching Award講演会を快く公開していただいた関係者の方に深く感謝いたします。

FDサロン

大学教育開発センターでは、教職員間の交流を目的とした「FDサロン」を毎月開催しています。今年度に入り、参加者が増え、回を重ねるごとに徐々に浸透しているように思われます。

今後も定期的にサロンを開催します。取り上げてほしいテーマ等、ご意見・ご要望をお寄せください。事前申し込みは必要ありませんので、お気軽にご参加ください。次回開催は9月の予定です。

大学教育開発センターのホームページ（http://www.ryukoku.ac.jp/fd/fdsaron/fd_saron.html）に案内や開催記録の詳細が載っていますので、ぜひご覧ください。

開催記録

第1回

話題提供者：上垣　豊（法学部教授）
開催日時：5月27日（木）　17:30～19:30
深草学舎紫英館2階東第2会議室
話　　題：「FDを考える　―大学教育改革への私見―」

第2回

話題提供者：村澤真保呂（社会学部講師）
開催日時：6月17日（木）　17:00～19:00
深草学舎紫英館1階大学教育開発センター
話　　題：「管理教育の現状とその対処」

第3回

話題提供者：近藤久雄（大学教育開発センター長・法学部教授）
開催日時：7月6日（火）　17:00～19:00
深草学舎紫英館1階大学教育開発センター
話　　題：「導入教育の模索」

第4回

話題提供者：小長谷大介（経営学部講師）
開催日時：7月15日（木）　17:00～19:00
深草学舎紫英館1階大学教育開発センター
話　　題：「教養教育のあり方についての私見
～科学史教育の経験から感じたこと～」

今後の予定

- 9月の担当コーディネーター……新井　潤（経済学部講師）
- 10月の担当コーディネーター……窪田和美（短期大学部助教授）、ファーマノフスキー・マイケル（国際文化学部助教授）
- 11月の担当コーディネーター……津島昌寛（社会学部助教授）、豊崎七絵（法学部助教授）
- 12月の担当コーディネーター……長谷川岳史（文学部助教授）、藤原　学（理工学部教授）

※詳しい日程など決まり次第、センターNewsやホームページにてお知らせいたします。

活動報告

◆新任教員対象研修会実施（4月1日・6日）

◆学生による授業評価調査（授業アンケート）実施（6月14日～26日）
台風の影響で28日まで実施

◆FDサロン
第1回：5月27日（木）
話題提供者：上垣　豊（法学部教授）
話　　題：「FDを考える―大学教育改革への私見―」
第2回：6月17日（木）
話題提供者：村澤真保呂（社会学部講師）
話　　題：「管理教育の現状とその対処」
第3回：7月6日（火）
話題提供者：近藤久雄（大学教育開発センター長・法学部教授）
話　　題：「導入教育の模索」
第4回：7月15日（木）
話題提供者：小長谷大介（経営学部講師）
話　　題：「教養教育のあり方についての私見
～科学史教育の経験から感じたこと～」

◆指定プロジェクト「教育評価」公開研究会
（4月19日・5月31日・6月28日・7月29日）

◆大学教育開発センター通信　第6号発行（4月30日）

◆大学教育開発センターNews発行
No.2004－1（4月6日）　No.2004－2（4月30日）
No.2004－3（5月6日）　No.2004－4（5月10日）
No.2004－5（5月18日）　No.2004－6（5月20日）
No.2004－7（5月27日）　No.2004－8（6月11日）
No.2004－9（6月16日）　No.2004－10（7月9日）

◇機能推進プロジェクト開催状況

■FD・教材等研究開発検討プロジェクト
2005年度自己応募プロジェクト募集にあたって（5月1日）
2005年度自己応募プロジェクトについて（6月15日）

■教育活動評価支援プロジェクト
2004年度の予定について（5月7日）
2004年度「学生による授業評価調査（授業アンケート）」の実施後の処理について（6月9日）
2004年度カリキュラムアンケートの実施について（6月18日）

■教材開発支援プロジェクト
2004年度事業について（5月25日）

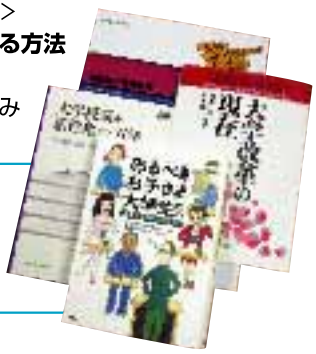
■交流研修プロジェクト
2004年度FDサロンの運用について（5月6日）

新着情報

大学教育開発センターでは、センターの資料として図書を購入しています。貸し出しも行っていますので、どうぞご利用ください。また、購入図書の希望も募っていますので、ご希望があればお知らせください。

書　籍　名…<講座「21世紀の大学・高等教育を考える」第1巻>
大学改革の現在
編・訳者名…有本　章・山本眞一
出 版 社 名…東信堂

書　籍　名…<高等教育シリーズ125>
大学授業を活性化する方法
編・訳者名…杉江修治・関田一彦
安永　悟・三宅なほみ
出 版 社 名…玉川大学出版部



書　籍　名…<教育調査第131集>
諸外国の高等教育
著　者　名…文部科学省編
出 版 社 名…国立印刷局

書　籍　名…**大学教育学**
著　者　名…京都大学高等教育研究開発推進センター編
出 版 社 名…培風館

書　籍　名…**恐るべきお子さま大学生たち**
――崩壊するアメリカの大学
著　者　名…サックス・ピーター
編・訳者名…後藤将之
出 版 社 名…草思社

先生の知恵袋

センターの職員として、先生方と関わる中で、この話は他の先生方にも役立つのではないだろうかと考えることがたくさんあります。センターに立ち寄られた先生の一言、FDサロン終了後の雑談の中、こういった中から拾いあげた先生方の持たれているひと工夫、みなさんにも紹介できれば・・・このような思いから、このコーナーが生まれました。

出席カードの裏面の活用と工夫

学生の声を聞こう！

出席カードの裏面を利用して、アンケートをとったり、質問・意見などをうけたりして、学生対応をしています。また、記入された質問や意見をレジュメにまとめ、次回の授業時に配布し、質問された内容の補足解説や意見に対する回答なども行っています。

論述能力を向上させよう！

学生の論述能力を訓練する必要性を感じ、毎回授業内容を3行程度の文章で要約させ、添削をして返却しています。その結果、期末試験の答案の論述に向上が見られました。

このように、出席カードの裏面の活用・工夫は、学生とのコミュニケーションを図るほか、ふだん、文章を書くことが少ない学生の文章力、日本語能力の向上にも一役買っているようですね。

おすすめの一冊

『授業の道具箱』

バーバラ・グロス・デイビス
東海大学出版会　2002年
2,800円

大学教育開発センターには、現在100冊近い本があります。その中で目に留まった『授業の道具箱』。「道具箱」という書名におもちゃ箱のようなイメージを持ち、開いてみました。そこには、学生の授業への動機づけの方法、ティーチングの向上のための策など、おもちゃならぬ授業を行うために参考となる道具が数多く並んでいます。

本学で2003年度に実施した「授業アンケート」で、学生が先生方に改善してほしい点№1となったのは「板書の仕方を工夫して欲しい」でした。この道具箱に入っているたくさんの道具のひとつ『教育用のメディアおよび器材　黒板（p.381～385）』から、当たり前のことかもしれませんが読みながらうなずける、授業では欠かすことのできない黒板の効果的な使い方について紹介します。

①効果的に黒板を使うには

- **その日の授業でのテーマや活動概要を示す**
  授業の途中で学生がその日のテーマは何だったかと思ったときに、どこに戻ればよいかを確認する上で役立ちます。90分消さないスペースをつくり、テーマや概要を書いておくこともよいかもしれません。
- **図表や絵を描く**
  話による説明だけでは理解しにくいことでも、図形を描くことで理解を促すことができます。学生が図形を書き写せるだけの時間を授業中に与えることも大切です。
- **重要な点を視覚的に強調する**
  1つのテーマを終える前に、板書の中のキーとなる言葉に下線、丸囲みなどを色チョークで描くことで、学生の記憶に印象深く残すことができます。

②黒板を使うコツ

- **チョークのきしむ音を防ぐ**
  チョークを45度の角度で持ち、黒板にしっかり押しつけて使います。チョークを半分に折ってから使っても、きしみ音を防ぐことができます。
- **読みやすく書く**
  字の大きさや濃さは、実際に教室の後ろからチェックするとよくわかります。時々、授業中に学生に「見えますか」と聞いてみるのもよいでしょう。
- **黒板の最も見えやすい部分を最も重要な点に使用する**
  黒板の左上が最も目立つ場所です。また、黒板の下の端は教室の後方にいる学生には見えない場合があります。学生が板書をとるのに首を傾けたり、位置を変えていたりしているときは、黒板が見えにくい証拠です。
- **授業の終わりに板書を完全に消す**
  普段からお願いしていることですが、黒板を消す時間を利用して、学生が話しかけるチャンスを作ることにもなります。

（大学教育開発センター事務室課員　内田順子）

※この書籍以外にも大学教育開発センターで貸し出しを行っています。どうぞご利用ください。

2005年度　自己応募プロジェクト募集開始

大学教育開発センターでは、教育改革を推進する一環として、学内の個人またはグループに対し、教育全般、授業、教材等の研究開発を奨励し、公開に対する支援を行うことを目的とし、自己応募プロジェクトを実施しています。

内容としては、公開授業とそれに伴う研究会開催、授業研究や授業報告書誌の作成、CDやビデオなどを含む自主教材の作成費、ゼミ等共通教材作成費、学生討論会・報告発表会を対象とした教育改革の検討、本学の教育改革に関する資料分析経費、高等教育問題に関する研究経費等が申請できます。応募方法の詳細は以下のとおりです。積極的な応募をお待ちしております。

また、募集要項・申請書につきましては、すでにメールボックスに配布いたしましたが、大学教育開発センターのホームページからもダウンロードできますので、是非ご利用ください。　http://www.ryukoku.ac.jp/fd/

応募方法

2005年度自己応募プロジェクト申請書にご記入の上、ご応募ください。

応募締切　**2004**年**12**月**3**日(金)

提出先　大学教育開発センター（内線1050、1051）

申請額
プロジェクトA（上限30万円）……採択件数目安：3件
プロジェクトB（上限20万円）……採択件数目安：4件
プロジェクトC（上限10万円）……採択件数目安：5件
プロジェクトD（上限5万円）……採択件数目安：5件
※但し、プロジェクトの応募状況によっては金額・件数を調整することがある。

CHECK!

応募内容
授業研究　a．教材に関するもの（教材作成、教材開発、テキスト作成）
b．手法に関するもの（受験的授業、学生討論会実施、授業法改善）
大学教育研究　a．大学全般、複数学部等に関わるもの

注意点
○研究代表者は本学専任教員に限る。共同研究者は専任教員・非常勤講師を問わない。
○原則として、1プロジェクトのみ応募できるものとする。
○計画は複数年度にまたがるのものでも可とするが、採否については単年度ごととする。

選考方法　大学教育開発センター運営委員会で審議のうえ決定する。

これまでに1998年度11件、1999年度11件、2000年度15件、2001年度12件、2002年度9件、2003年度10件の支援を行ってきました（2004年度12件、現在進行中）。各々の研究成果は、毎年度発行している「FD・教材等研究開発報告書」にまとめられています。

※2005年度の指定プロジェクト募集につきましては、詳細が決まり次第、センターNewsやホームページにてお知らせします。

ご利用ですか？

自動採点・成績管理ソフト　SSくん

「自動採点・成績管理ソフト　SSくん」は、深草学舎紫英館2階の研究サポート室に設置されており、定期試験、小テスト、授業評価、出欠確認、アンケート等の自動採点・成績管理ができます。

一度利用された方は、その後、その便利さ、正確さから定期的に利用されています。興味のある方は、大学教育開発センターまでご連絡ください。お待ちしております。

◆編集後記

『大学教育開発センター通信』第7号ができあがりました。まだ生まれて間もない大学教育開発センターが、関係の委員の先生方および課員の方々のご尽力により、徐々にその活動を充実させている姿が、ご紹介できればと念じつつ本通信をお届けします。

最近はようやく「FD」ということばも定着してきたようですが、組織的な高等教育研究としてのFD活動となると、まだまだ多くの課題を残しているようです。たとえば、プロジェクト活動の成果を龍谷大学の教育にどう活かしてゆくか、学生による授業評価調査（授業アンケート）とFD活動や日々の授業との生産的な関係をどのように構築するか等々、いずれも一朝一夕には答えの出そうにない問題です。『大学教育開発センター通信』が、そうした問題を皆様にお考えいただくきっかけになれば、望外の喜びです。

大学教育開発センター長　近藤久雄